

3 学校概要

見附高等学校は、昭和 38 年 11 月に、長年にわたる地元住民の熱願を受けて開校し、令和 4 年に創立 60 周年を迎えた全日制普通科の見附市唯一の県立高校である。創立当時は、普通科 3 学級、家政科 2 学級でスタートしたが、平成 16 年に家政科を閉科し、平成 20 年には普通科 4 学級募集となった。令和 5 年 4 月には県立月ヶ岡特別支援学校見附分校（以後、見附分校）を併設し、令和 6 年度から普通科 2 学級募集となり、現在に至る。

今年度、見附分校が 3 学年揃ったことを機に、従来の交流の幅を広げ、新たな教育活動を始めた。教員主導の交流から両校生徒の自発的な交流に移行することで互いを認め合い尊重する心を養い、多様化する社会を生き抜くためのスキルや、ものごとを多面的に捉える力を育成していきたいと考えている。

なお、本校は今年度より 3 年間、「県立高校の将来構想」推進事業（学校間連携）の指定を受けており、本事業を活用して探究活動の整備を進めるとともに、併設校との交流など本校独自の条件を生かした教育活動の再構築に取り組んでいる。

（1）校訓

「最善を尽くす

～深慮にして実践する 誠実にして勉勵する 和親にして敬愛する～

初代校長自らが制定した校訓であり、令和の時代となった今でもなお語り継がれ受け継がれている。平成 25 年 4 月には、創立 50 周年記念事業として、正門にその文字が刻まれ、登校する生徒たちを見守っている。



正門に刻まれた校訓

（2）スクールミッション

ア「最善を尽くす」の校訓のもと、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」（知・情・意・体）を育み、自分の将来を自分で設計し、夢を実現する力を育成する。

イ主体的・対話的で深い学びや他者との協働をとおして、社会で必要となる基礎的な力を育成する。

ウ見附市唯一の公立高校として、地域と連携した取組を進め、体験的な学習や探究活動をとおして将来地域社会に貢献できる人材を育成する。

スクールミッションを達成するためには、自ら考え、自ら動き発信していく、いわば、「自走する生徒」の育成が不可欠である。また、本校は信越本線見附駅から徒歩 5 分という立地条件にあり、生徒の通学地域は地元見附地区が 2 割、電車通学県内の長岡地区から 5 割、三条地区から 3 割が通学している。地元以外から通学する生徒が 8 割を占めることから、見附という地域での活動そのものが、生徒にとって新たな学びにつながると考えた。また、18 歳人口の流出は、新潟県の大きな課題である。見附高校で学ぶことで、主体的に地域の課題を考え、解決の具体的方策やアイデアを出し合う主体的な経験につながり、そのことにより卒業した後も故郷に愛着を持ち続け、故郷のために力を尽くす人材を育てていくことにつながるといふ考えが今回の教育活動の原点である。

4 「県立高校の将来構想」推進事業（学校間連携）の取組

（1）全体計画 ※ 下図は見附分校との連携

全体計画は「横のつながり」と「縦のつながり」を意識して作成した。

外部連携を「横軸」に例え、その中心に見附分校との連携がある。新潟県内で本校と同様に特別支援学校を併設する県立村松高等学校や県立有恒高等学校とそれぞれが併設校する特別支援学校、また、これからの探究活動でつながっていく新たな外部連携先の広がり「横のつながり」と見立てた。



また、本校の校内での3カ年の体系的な探究学習計画を「縦軸」に例え、1学年「見附で学ぶ」→2学年「見附を離れて学ぶ」→3学年「自らのテーマを追究」→「進路指導」という設定で枠組みを設計した。このように視点を変えながら学びを深めていくプロセスを「縦のつながり」と見立てた。

(2)【横軸】見附分校との連携を軸とした外部連携

○中庭プロジェクト ～ イングリッシュガーデンプラスアートの融合 ～

校内の中庭を、見附市とみつけイングリッシュガーデンに御協力いただきながら整備し、両校の生徒が交流する拠点づくりを両校生徒で行った。

また、イングリッシュガーデンに学校としての特色を加えるために「アート」の要素を入れて設計した。生徒の美術作品などを屋外展示できるように、美術教員がベースデザインに携わり、有志生徒の発想や意見を生かしながら庭づくりと交流事業を行っている。11月には両校生徒で花壇造りを行った。校内にも美術作品を飾るなど校舎全体に統一感を持たせている。今年度は九月の文化祭での一般公開を目標とし、作成段階を記録した動画を公開し、見附市長はじめ多くの一般の方が来校した。



庭のベースデザイン (春)



有志生徒による作業開始 (真夏)



文化祭での一般公開 (9月)



両校生徒による花壇づくり (11月)

○コーヒープロジェクト～共生社会の実現への学び～

見附分校がつくっているコーヒーのドリップパックについて新たな「ブランディング」への活動取材し、インタビュー動画を作成し、文化祭で一般公開した。今後、見附分校の生徒の取組やコーヒーの魅力を伝えるイメージ動画を作成し、多言語化していく展開を考えている。

○六校会議 ～生徒によるオンライン会議～

県内で特別支援学校を併設する3校とその併設校（村松高等学校と五泉特別支援学校村松分校、有恒高等学校と上越特別支援学校有恒学舎、見附高等学校と月ヶ岡特別支援学校見附分校）の生徒がオンラインで一堂に会し、各校の連携について紹介し、情報共有する。司会進行も主体性を重んじ、生徒が担当する。

（3）【縦軸】地域と連携した探究学習の整備（縦軸）

令和7年度の各学年の探究学習に関する主な取組をあげた。学ぶ視点を統一しているが、教育活動のメインテーマは各学年のアイデアを尊重しているため、次年度の各学年の活動自体はマイナーチェンジをしていくことになる。

○1学年【見附で学ぶ】

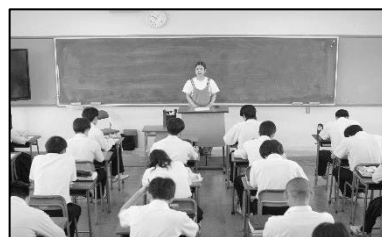
- ・幻の酒米 雄町プロジェクト
- ・企業見学・企業講話
- ・夢を追う若者の講演会

○2学年【見附を離れて学ぶ】

- ・ふるさと納税返礼品の考案
- ・パソナ本社訪問（修学旅行）と地方創生プログラム

○3学年【自らのテーマを追究】主体的な研究活動

- ・中庭プロジェクトへの有志参加
- ・地域の避難所プロジェクトへの有志参加
- ・政経 「みつけ農業女子」と考えるアイデア商品考案
- ・プロモーション動画の作成



（4）生徒のこころを育てる取組

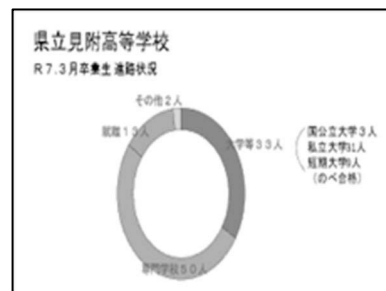
○SCによるコミュニケーション講座

見附分校の生徒と連携を深めるにあたり多様な背景を持つ人とどうつながるかをテーマに、心理学的知識やスキルを学ぶ講座を開いた。開催にあたり、SCが見附分校の管理職と内容を協議し、「共生」というテーマのもと、講座の趣旨や内容を綿密に練り上げた。今年度は、3学期に開催する「六校会議」をゴールとし、全5回の実施となった。



（5）進路指導の新たな道すじ

本校の進路状況は、例年、大学・短大が約4割弱、専門学校等への進学が約5割、就職が約1割強の割合で推移している。4年制大学進学者の数名が県外に出る以外は概ね県内志向である。昨今利用枠が拡大した年内入試への対応が本校の課題である。



○年内入試職員研修会

時代の流れを見て、本校も今後は総合型・学校推薦型選抜等、年内入試の指導も充実させていく予定である。(株)ベネッセ・コーポレーションより講師を招き、本校の進路指導における現状分析と年内入試についての職員研修を実施した。



(6) 合同職員研修の実施

○第1回

新規事業の核になる「コラボティブ・マーケティング」についての研修を、御指導いただく新潟大学経済科学部准教授 伊藤龍史准教授を招き、実施した。また、特別支教育の研修を兼ね、月ヶ岡特別支援学校校長からも御指導いただいた。



○第2回

県外先進校視察の研修成果について発表し、両校の教職員で研修した。当日は、オンラインで県立有恒高等学校も参加した。



視察校

○特別支援併設をテーマとした視察

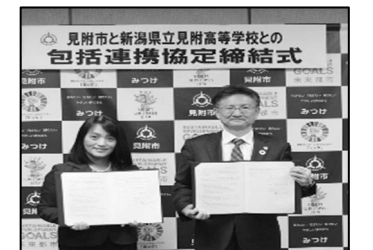
- ・埼玉県立武蔵野高等学校・埼玉県立大宮北特別支援学校さいたま西分校
- ・東京都立志村学園

○探究活動をテーマとした視察

- ・群馬県立吉井高等学校 ・神奈川県立瀬谷高等学校 ・新渡戸文化高等学校

(7) 見附市との包括連携協定締結

見附市の本校における探究活動やキャリア教育、アントレプレナーシップ教育への多大なる御協力と御支援を形にするべく、令和7年11月11日に、見附市役所にて包括連携協定を締結した。



(8) 次年度構想

○連携事業の発展的継続

見附市と新潟大学経済科学部との連携によりさらに探究活動をさらにブラッシュアップし、見附分校や外部との連携活動やその教育内容に広がりや意義を持たせていくこと、主体的に動く生徒の活動を支援することで、さらに「自走する生徒を育てていくこと」が次年度の課題である。

○多様化をキーワードにした国際的視点の醸成

次年度見附市が隔年実施している中学生のベトナム派遣事業に高校生も参加できるようになった。見附分校との教育活動で養った学びの視点を、次は海外に展開しようと構想している。

今年度、有志生徒が地域の課題解決の一貫として「地域の避難所プロジェクト」を行った。市内在住の外国人居住者データを活用して言語を選び、多言語案内表示を作成し、掲示した。また、ベトナム人技能実習生に、翻訳機能を用いて表示の説明や避難所となる校内を案内するなど、多様化社会における共生を意識した活動となった。今後は、もっと地域課題に焦点を絞り「災害が起きたときに、外国人研修生徒高校生が力を合わせて地域の人たちの助けとなる」方策を模索したい。そのためにも JICA 等への連携などを視野に、生徒自らが地域課題を考え主体的に動く仕組みを考えていきたい。

5 「自分で考え行動する生徒」の育成 ～1年目の実績～

「中庭プロジェクト」は、新事業の核となる一大プロジェクトである。時を追うごとに、中庭が整備されていく様子を見つめていた生徒達の中には、学校全体の空気の変化を察知する生徒も少なくなかった。このように、学校全体の空気が、生徒のマインドに影響を与え、「やってみよう」「やってみよう」につながった1年目の事例を紹介する。

○2025 年 中日友好「朱鷺杯」青少年受賞者訪中団参加報告（見附市長へのプレゼンテーション）



○英語スピーチコンテストへの参加

○国際交流（ベトナムダナン市の中学生との交流）



○地域の避難所プロジェクト

- ・ピクトグラム付多言語案内表示作成
- ・地域の外国人技能実習生へのベトナム語による校内案内と案内表示のタブレットの翻訳機能を活用した説明



6 おわりに

併設する見附分校とは、学校行事の合同開催の他にも、本校の特別支援教育でも御協力いただくなど教育活動において常に積極的に「連携」する間柄ではあったが、今回を機に、さらに両校の教職員の距離が縮まったと感じる。それぞれの専門性を尊重しつつ校種の垣根を越えて活動すること自体が、両校の教員にとっても研修となっている。

ある日、コーヒープロジェクトに関して、見附分校から「販売戦略として従来の認知順序を覆したい。おいしいコーヒーが見附にあると聞き、調べたら特別支援学校だった、という展開にしたい」との提案があった。これこそが、私たちが目指す『共生社会』の姿であると感じ、すぐにそのコンセプトを生徒に伝えると共感した生徒が、見附分校に取材を申し入れ、インタビュー動画を作成し、文化祭で一般公開する運びとなった。

「連携」というと、活動そのものに目が向きがちだが、実際にはコンセプトの共有やゴールの設定こそが重要である。これからも、併設する見附分校との取組をブラッシュアップさせることで、新たな分野での新たな学びをリードする存在になりたいと考えている。

また、学校をデザインするという視点からも、地域とのつながり、地域で御協力いただける方のご縁はかけがえのない財産である。学校が置かれている地域をステージとして、「そこで学び、そこで生徒を育てていく」という発想を常に忘れず、次世代の人材を育てていきたい。